

「英語教育改善プラン」に基づいた児童生徒の英語力と教員の指導力向上に向けた取組 「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～愛知県～

課題

- ・新学習指導要領の全面実施に向け、小・中・高の児童生徒の英語力及び英語教育担当教員の指導力の向上を図る。
- ・指導と評価の改善を通して生徒の英語運用能力の向上を図る。

具体的な取組内容

- ①特定地域における小中学校の英語指導力向上に係る事業
[H26・27:新城市、H28:津島市、H29:刈谷市、H30:犬山市]
 - ・大学教授等を講師として招聘した研修の実施
 - ・研修協力校等での公開授業及び研究協議
- ②県内全域の県立高校の英語科教員に向けた研修等
[H26:津島高・刈谷北高・豊橋東高、H27～H29:千種高・津島高・御津高、H30～:千種高・尾北高・御津高]
 - ・生徒の英語運用能力の向上
 - ・教員の指導方法の充実にに向けた取組の実施
 - ・研究成果の普及・還元

成果の波及・周知

- ①特定地域における小中学校の英語指導力向上に係る事業
県内の市町村及び教育事務所の担当指導主事を対象とした英語教育担当主事会で、「英語教育改善プラン」について周知するとともに、特定地域における本事業の成果や課題について報告をし、他の市町村への普及を図った。
- ②あいちスーパーイングリッシュハブスクール事業
研修協力校等に近隣の小中高の英語担当教員が集まり、研究授業や研究協議による授業研修を実施。また、全県立高校の英語教員等を対象にイングリッシュフォーラムを開催し、研修協力校等による研究発表や生徒による発表等を通じ、普及を図った。

成果と課題①

OH30の犬山市の取組から

- ・教員の英語の使用の割合と生徒の英語による言語活動時間の割合が向上するとともに、生徒のCEFR A1レベル相当以上の英語力をもつ生徒の割合に向上が見られた。
- ・県全体では、生徒の英語力割合が下回っており、成果の還元・普及が課題である。

	H29	H30
授業における発話の50%以上を英語で行う教員の英語使用の割合(%)	56.5	70.1
生徒の英語による言語活動の割合が50%以上である教員の割合(%)	73.9	87.0
CEFR A1レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)	36.3	46.8

(平成30年度英語教育実施状況調査)

成果と課題②

〇これまでの県立高校の取組から

研修協力校3校	H23	H30
授業における発話の50%以上を英語で行う教員の英語使用の割合(%)	69.4	89.4
生徒の英語による言語活動の割合が50%以上である教員の割合(%)	33.3	76.8
CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)	53.1	48.6

研修協力校3校と県立高校(平成30年度)	県立	協力校
授業における発話の50%以上を英語で行う教員の英語使用の割合(%)	33.0	89.4
生徒の英語による言語活動の割合が50%以上である教員の割合(%)	61.3	76.8
CEFR A2レベル相当以上の英語力を有する生徒の割合(%)	30.1	48.6

(英語教育実施状況調査)

課題解決のための手立て

- 小学校高学年の英語の教科化、中学年の外国語活動の実施に向け、小学校教員対象の研修をさらに充実させる。
- 英語教育における小中高連携を強化し、新たな英語学習のしくみづくりや児童生徒の学びをつなげる指導方法を研究する。
- 外部専門機関との連携により授業改善を更に進めるべく研修をさらに充実させる。
- 設定したCAN-DOリストを定期的に見直し、実際の授業で活用できるものにする。また、CAN-DOリストを学校のホームページ等で公表する。
- 評価の妥当性と信頼性の向上
- アイデアの共有、研究成果の還元
- 英語教育改善プランの更新

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～犬山市立犬山西小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・英語教科免許を持たない教員の外国語指導に対する不安と技能不足を補うための研修
- ・楽しく学ぶ活動から、力を身に付けるための教科への質的転換への対応

具体の取組の内容

- 1 外部指導者を招聘し、講演会と研修会を開催して、外国語教育の現状と具体的手法を学ぶ。
- 2 スーパーイングリッシュハブスクールにおいて望まれる子どもの姿を参観し、指導像を共有する。
- 3 外部指導者を招聘し、英会話を中心とした学習形態を学び、学校全体で共有することで、外国語授業への不安を解消する。
 - ① 活動型(3・4年生)・教科型(5・6年生)に共通する基本の教室英語、英語指導における基礎知識を身に付ける。
 - ② 教員自身の英語基礎力を向上するための学習法を習得する。
 - ③ NET(犬山市ではALTをNative English Teacher と呼称)とのコミュニケーション練習を、教科書や補助教材を使用して行う。
 - ④ 英語指導に活用できるアクティビティやゲーム、チャンツなどを学び、実践する。
 - ⑤ 授業計画や年間計画の立て方を学び、目標の立て方とそれに伴う評価についても学ぶ。
- 4 外部指導者を招聘し、外国語指導に関する現状と、移行期における留意事項や移行後の取り組み方について学ぶ。
- 5 TOEICテストを受験することで、教員自身の研修後の力量向上を測る。
- 6 週時程を30時間を原則として授業時間を確保し、週2時間、年間70時間の外国語授業時間数を確保する。
- 7 英語専科教員の巡回指導を受け、外国語授業の円滑な推進を図る。
- 8 外国語授業・外国語活動専用の教室を設置し、教室掲示の工夫、教具の共有、授業準備の負担軽減を図る。
- 9 犬山市外国語活動英語教育研究委員会において、授業力向上指定研究授業を参観し、授業の在り方を協議・検証する。

成果①

教員アンケートより

問1 この事業を通して外国語授業に対する不安は解消しましたか				
①とても思 う	②そう思 う	③あまり思 わない	④思わ ない	⑤不安はな かった
9%	91%	0%	0%	0%
問2 この事業を通して外国語授業の技能や手法を身に付けることができたか				
①とても思 う	②そう思 う	③あまり思 わない	④思わ ない	
9%	91%	0%	0%	
問3 この事業を通して、自らの英語力は向上したと思いますか				
①とても思 う	②そう思 う	③あまり思 わない	④思わ ない	
9%	73%	18%	0%	
問4 この事業を通して、身に付けた力を実際の授業に生かすことができたか				
①とても思 う	②そう思 う	③あまり思 わない	④思わ ない	
0%	82%	9%	9%	
問5 今後もこうした研修や講演の機会があれば参加したいと思いますか				
①とても思 う	②そう思 う	③あまり思 わない	④思わ ない	
64%	36%	0%	0%	

成果②

学校の様子から

- ① 研修や講演会に教員が積極的に参加する姿が見られた。
- ② NETとの連携を各学年毎に共有することで、どの担任も授業の中での役割を明確に意識することができ、授業に積極的に取り組むことができるようになった。
- ③ 英語に対する苦手意識を解消し、進んで英語を用い、NETとのコミュニケーションを児童に対して示範することができるようになった。
- ④ 教員単独の授業においても、担任が積極的に英語を使用して授業に取り組む姿が見られた。
- ⑤ 授業の組立を体系化することで、児童に基本的な「話すこと・聞くこと」の能力が身に付いてきている。
- ⑥ 事業終了後も前向きに力量向上に向けて取り組もうとする意欲や態度が見られた。

今後の課題・方向性

本校には、中学校免許として英語を専科とする教員が複数在籍し、そうした教員がこれまでの研修で学んできたことを校内に環流してきた。また、今年度より英語専科教員の巡回を5・6年生の全ての学級に受けることができ、年間70時間の授業の内、専科教員で35時間、担任とNETとのTTで35時間を行うことができています。こうした点で、担任は非常に心強く授業を進めることができ、個々の指導力の向上にもつながっている。

また、上記のことは3・4年生の担任にもよい影響として波及しており、これまで英語に不慣れであった教員も高学年の授業から多くのことを学び、指導力向上に役立てることができている。

ただし、英語専科教員の配置は今年度限りであるので、次年度からは他校と同じように担任のみで授業を進める必要に迫られる。この点を見据えて、外国語授業・外国語活動の年間計画の見直しをはじめとして、NETとのTT授業と担任単独授業の内容の整理や位置付けの検討に入っている。

今後は犬山市の新たな取り組みとして計画されている放課後英語サロンやイングリッシュキャンプを取り入れ、教員自身の英語教育への抵抗感を取り除きつつ、英語への慣れ親しみを深め、学校全体の英語指導力向上につなげていきたい。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～犬山市立犬山南小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・英語教科免許を持たない教員の外国語指導に対する不安と技能不足を補うための研修
- ・楽しく学ぶ活動から、力を身に付けるための教科への質的転換への対応

具体の取組の内容

- 1 外部指導者を招聘し、講演会と研修会を開催して、外国語教育の現状と具体的手法を学ぶ。
- 2 スーパーイングリッシュハブスクールにおいて望まれる子どもの姿を参観し、指導像を共有する。
- 3 外部指導者を招聘し、英会話を中心とした学習形態を学び、学校全体で共有することで、外国語授業への不安を解消する。
 - ① 活動型(3・4年生)・教科型(5・6年生)に共通する基本の教室英語、英語指導における基礎知識を身に付ける。
 - ② 教員自身の英語基礎力を向上するための学習法を習得する。
 - ③ NET(犬山市ではALTをNative English Teacherと呼称)とのコミュニケーション練習を、教科書や補助教材を使用して行う。
 - ④ 英語指導に活用できるアクティビティやゲーム、チャンツなどを学び、実践する。
 - ⑤ 授業計画や年間計画の立て方を学び、目標の立て方とそれに伴う評価についても学ぶ。
- 4 外部指導者を招聘し、外国語指導に関する現状と、移行期における留意事項や移行後の取り組み方について学ぶ。
- 5 TOEICテストを受験することで、教員自身の研修後の力量向上を測る。
- 6 外国語授業をモジュール化して朝学習として取り組むことで、週時程内での毎週2時間の外国語授業時間の確保を図る。
- 7 犬山市外国語活動英語教育研究委員会において、授業力向上指定研究授業を参観し、授業の在り方を協議・検証する。

成果①

教員アンケートより

問1 この事業を通して外国語授業に対する不安は解消しましたか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	⑤不安はなかった
9%	91%	0%	0%	0%
問2 この事業を通して外国語授業の技能や手法を身に付けることができましたか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	
9%	91%	0%	0%	
問3 この事業を通して、自らの英語力は向上したと思いますか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	
9%	73%	18%	0%	
問4 この事業を通して、身に付けた力を実際の授業に生かすことができましたか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	
0%	82%	18%	0%	
問5 今後もこうした研修や講演の機会があれば参加したいと思いますか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	
55%	45%	0%	0%	

成果②

学校の様子から

- ① 研修や講演会に教員が積極的に参加する姿が見られた。
- ② 英語に対する苦手意識を解消し、進んで英語を用い、NETとのコミュニケーションを児童に対して示範することができるようになった。
- ③ 教員単独の授業においても、担任が積極的に英語を使用して授業に取り組む姿が見られた。
- ④ 授業の始まりから終わりまでの流れを意識して、授業計画を立てることができ、実践することができるようになった。このため、児童の振り返りに「できるようになった」という内容が見られるようになった。
- ⑤ 授業の組立を体系化することで、児童に基本的な「話すこと・聞くこと」の能力が身に付いてきている。
- ⑥ 事業終了後も前向きに力量向上に向けて取り組もうとする意欲や態度が見られた。

今後の課題・方向性

今回の事業を進めることで、教員の英語に対する不安を解消するためには「英語を自ら用いる機会の確保」が大変有用であることが分かった。ただし、日々の勤務の中ではこうした機会をもつことはとても難しく、個々の取組に依存する状況であった。

また、児童に対する評価という点では、教員の疑問や不安が解消されたとは言い難い状況であることは変わりがない。どのような観点でどのように評価するのかが現段階では不明なので、この点を不安に感じている教員は多い。

こうした点を踏まえて、犬山市では次年度に向けて二つの事業を計画している。一つ目は学校における休憩時間に自由にNETと歓談できる仕組みと環境づくり(放課後英語サロン)である。職員室の一角を歓談場所として設定し、週1日のどこかの時間帯を歓談時間として位置付けるというものである。NETには職務の一環として勤務を割り振るが、教員にとってはあくまでも休憩中のくつろいだ雰囲気、NETと雑多な会話を英語で交えることで日常的に英語に慣れ親しむ機会を設けようという意図である。

二つ目は、教員対象のイングリッシュキャンプの開催である。半日もしくは終日の企画として、英会話を基本としたコミュニケーションから英語への慣れ親しみを深めようとするものである。英語を用いる必然的な状況を作ることで、英語への苦手意識や不安感を少しでも払拭できるようになると考えている。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～犬山市立犬山北小学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・英語教科免許を持たない教員の外国語指導に対する不安と技能不足を補うための研修
- ・楽しく学ぶ活動から、力を身に付けるための教科への質的転換への対応

具体の取組の内容

- 1 外部指導者を招聘し、講演会と研修会を開催して、外国語教育の現状と具体的手法を学ぶ。
- 2 スーパーイングリッシュハブスクールにおいて望まれる子どもの姿を参観し、指導像を共有する。
- 3 外部指導者を招聘し、英会話を中心とした学習形態を学び、学校全体で共有することで、外国語授業への不安を解消する。
 - ① 活動型(3・4年生)・教科型(5・6年生)に共通する基本の教室英語、英語指導における基礎知識を身に付ける。
 - ② 教員自身の英語基礎力を向上するための学習法を習得する。
 - ③ NET(犬山市ではALTをNative English Teacherと呼称)とのコミュニケーション練習を、教科書や補助教材を使用して行う。
 - ④ 英語指導に活用できるアクティビティやゲーム、チャンツなどを学び、実践する。
 - ⑤ 授業計画や年間計画の立て方を学び、目標の立て方とそれに伴う評価についても学ぶ。
- 4 外部指導者を招聘し、外国語指導に関する現状と、移行期における留意事項や移行後の取り組み方について学ぶ。
- 5 TOEICテストを受験することで、教員自身の研修後の力量向上を測る。
- 6 担任と英語専科教員のT・T授業、担任とNETとのT・T授業を進め、外国語授業の円滑な推進を図る。
- 7 外国語授業・外国語活動専用の教室を設置し、教室掲示の工夫、教具の共有、授業準備の負担軽減を図る。
- 8 年間授業総時間数の余剰を活用して、高学年における外国語授業年間授業時数70時間の確保を図る。
- 9 犬山市外国語活動英語教育研究委員会において、授業力向上指定研究授業を参観し、授業の在り方を協議・検証する。

成果①

教員アンケートより

問1 この事業を通して外国語授業に対する不安は解消しましたか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	⑤不安はなかった
8%	84%	8%	0%	0%
問2 この事業を通して外国語授業の技能や手法を身に付けることができましたか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	
8%	92%	0%	0%	
問3 この事業を通して、自らの英語力は向上したと思いますか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	
8%	67%	25%	0%	
問4 この事業を通して、身に付けた力を実際の授業に生かすことができましたか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	⑤無回答
0%	83%	0%	0%	17%
問5 今後もこうした研修や講演の機会があれば参加したいと思いますか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	
67%	33%	0%	0%	

成果②

学校の様子から

- ① 研修や講演会に教員が積極的に参加する姿が見られた。
- ② 英語専科教員が中心となり、外国語授業の進め方を校内で共有することと合わせて、研修や講演で得た情報も校内で共有することで、英語に対する教員全体の意識を変えていくことと、指導力の向上を図ることができた。
- ③ 専科教員単独の授業、専科教員とNETとのT・T授業を他の教員が参観したり、共有したりすることで、外国語授業・外国語活動の進め方を学ぶことができ、学校全体の指導力向上につながっている。
- ⑤ 授業の組立を体系化することで、児童に基本的な「話すこと・聞くこと」の能力が身に付いている。
- ⑥ 事業終了後も前向きに力量向上に向けて取り組もうとする意欲や態度が見られた。

今後の課題・方向性

今年度より英語専科教員の配置を受けて、3～6年生の全ての学級で英語専科教員の授業を行うことができています。5・6年生は年間70時間の授業の内、専科教員で35時間、専科教員とNETとのTTで35時間を行っている。児童への指導については専科教員として充実したものに行えることは当然であるが、永続的な仕組みではないため、専科教員が配置されなくなった場合の不安はつきまとう。

こうした点を踏まえて、外国語授業の受け持ちのあるなしに関わらず、できる限り多くの教員が本事業の研修や講演に参加して、外国語教育について学ぶことに努めた。今すぐには実際の指導に役立てることはできないが、今後のために学んでおこうとする姿勢がアンケート結果からも読み取ることができる。

今後の課題としては、専科教員が配置されなくなった時のことを考えて、市内他校のように担任とNETとのT・T授業と担任単独の授業をどのように組み合わせ、教育課程を進めていくのかを検討する必要があるという点である。

今後は犬山市の新たな取り組みとして計画されている放課後英語サロンやイングリッシュキャンプを取り入れ、教員自身の英語教育への抵抗感を取り除きつつ、英語への慣れ親しみを深め、学校全体の英語指導力向上につなげていきたい。

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」～犬山市立犬山中学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・言語活動の充実と英語を主として用いる授業を行うための授業力・指導力向上のための研修
- ・「CAN-DOリスト」形式による学習到達目標の設定と達成状況を把握するための評価の在り方

具体の取組の内容

- 1 外部指導者を招聘し、講演会と研修会を開催して、外国語教育の現状と具体的手法を学ぶ。
- 2 スーパーイングリッシュハブスクールにおいて、中学校卒業後の生徒の姿を参観することで、中学校での指導の在り方を考える。
- 3 外部指導者を招聘し、英会話を中心とした学習形態を学び、学校全体で共有することで、外国語授業への不安を解消する。
 - ① 活動型(3・4年生)・教科型(5・6年生・中学生)に共通する基本の教室英語、英語指導における基礎知識を身に付ける。
 - ② 教員自身の英語基礎力を向上するための学習法を習得する。
 - ③ NET(犬山市ではALTをNative English Teacherと呼称)とのコミュニケーション練習を、教科書や補助教材を使用して行う。
 - ④ 英語指導に活用できるアクティビティやゲーム、チャンツなどを学び、実践する。
 - ⑤ 授業計画や年間計画の立て方を学び、目標の立て方とそれに伴う評価についても学ぶ。
- 4 外部指導者を招聘し、小学校における外国語指導に関する現状と、移行期における留意事項や中学校への接続について学ぶ。
- 5 TOEICテストを受験することで、教員自身の研修後の力量向上を測る。

成果①

教員アンケートより

問1 この事業を通して外国語授業に対する不安は解消しましたか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	⑤不安はなかった
13%	73%	7%	0%	7%
問2 この事業を通して外国語授業の技能や手法を身に付けることができましたか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	
7%	93%	0%	0%	
問3 この事業を通して、自らの英語力は向上したと思いますか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	
7%	66%	27%	0%	
問4 この事業を通して、身に付けた力を実際の授業に生かすことができましたか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	
0%	87%	13%	0%	
問5 今後もこうした研修や講演の機会があれば参加したいと思いますか				
①とても思う	②そう思う	③あまり思わない	④思わない	
60%	40%	0%	0%	

成果②

学校の様子から

- ① 研修や講演会に教員が積極的に参加する姿が見られた。
- ② NET不在の中でも、授業中に積極的に英語を用いて、授業を進めようとする姿が見られた。
- ③ 生徒の発話を促し、積極的にコミュニケーションを図る機会を設けていた。
- ④ 単元毎の授業内容を踏まえつつ、授業の始まりから終わりまでの流れを意識して、授業計画を立てることができ、実践することができるようになった。
- ⑤ 授業の組立を体系化することで、生徒に「話すこと・聞くこと・書くこと」の能力が身に付いている。
- ⑥ 事業終了後も前向きに力量向上に向けて取り組もうとする意欲や態度が見られた。

今後の課題・方向性

今回の事業に取り組む中で、中学校英語教員にとって研修や講演の内容が不十分であることが分かった。今回の事業では、主に小学校教員の英語授業に対する不安の解消と指導力向上を目指したため、率直に中学校教員にとっては物足りない内容になってしまったようである。

また、昨年度までは英語の授業研究を小中合同で行い、小中接続の在り方を検討してきたのであるが、今年度からは、小学校の授業に焦点を当てることや、これに伴うNETの配属変更を進めてきたこともあり、こうした点においても中学校英語教員の指導力向上に十分つながったとは言えないようである。

ただし、高等学校において1年生の授業に参加できたことは大きな収穫であり、今後の授業改善につながるものであると考える。中学校を卒業して半年を過ぎた時期に、生徒がどのような姿を示しているのかを念頭に置いた指導を進めることができるからである。

今後は、教員が英語を用いて授業を進めることと、生徒が積極的に英語を用いることの位置付けと相関を検討しつつ、評価のあり方も含めて、さらなる指導力の向上と犬山市全体の英語指導に向けての意識の共有を図っていきたい。

平成27～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～愛知県立御津高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・国際教養科と普通科の生徒の間の英語の能力の差が大きく、また英語に対して苦手意識を持っている生徒も多いため、英語に触れさせる機会を増やし、英語への抵抗感を減らす。また、生徒の現状を把握し、生徒に合った、より効果的な授業を考案する。
- ・英語力の正確な把握とバランスの取れた英語力を育成するため、校内のパフォーマンステストだけでなく、民間の外部検定試験等も利用する。

具体の取組の内容

- ・生徒がより多くの英語に触れることができるよう、オールイングリッシュでの指導を実施
- ・毎週木曜日をイングリッシュ・デーに設定し、英語による学校生活を体験する機会を提供
- ・スピーキング、ライティング能力を把握するために、パフォーマンステストを計画的に実施
- ・国際教養科1年生による近隣の小学校での出前授業
- ・国際教養科の2年生を対象とした、ALT等と共に過ごす2泊3日のイングリッシュキャンプの実施
- ・夏季休暇中のオーストラリアへの生徒派遣(希望者のみ、2週間ほど)
- ・小学校・中学校を含めた校内外の授業参観や研究協議の実施。また、大学等からの有識者による研究協議の場での指導・助言
- ・4技能を測定する民間の外部試験(GTEC・英語検定など)の実施

成果①

- ・英語力の大幅な伸長
CEFR A2レベル相当以上の英語力を有すると思われる生徒数(全校)
H27 35.3%⇒H29 44.2%
25%アップ
平成26年度入学生(国際教養科)のGTEC(3技能)のスコア
1年次462点⇒3年次602.8点
30%アップ
平成27年度入学生(国際教養科)のGTEC(3技能)のスコア
1年次465.8点⇒3年次596.7点
28%アップ

成果②

- ・教員は小・中学校での英語指導の現状を把握し、小・中・高の学びの継続性を意識した英語指導を実践することができた
- ・出前授業を体験した生徒は、聞き手に合わせて使用する英語表現や話し方を変えることの大切さを学ぶことができた
- ・有識者から指導・助言を得て、英語科内で授業を客観的に評価し、より効果的な授業の考案に努めた

今後の課題・方向性

- ・小・中学校との連携をさらに深め、入学生徒が高校での英語教育に円滑に順応できるような授業の計画・実施する
- ・民間の外部試験を実施するだけでなく、その結果を共有し、4技能を統合させたより効果的な指導法を探る
- ・特に、ライティング能力の育成のために、体系的な指導法の検討

平成27～30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～愛知県立千種高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・思考力・判断力に基づいた、英語による表現力の育成
- ・パフォーマンステストを計画的に実施し、評価に組み入れる

具体の取組の内容

- ・公開授業及び研究協議
あいちスーパーイングリッシュハブスクール事業の一環として、地区内9校の英語科教員を対象に実施
- ・授業力向上研修及び向上講座
愛知県立大学や名古屋市立大学等の教授の講演と質疑応答の実施(平成30年度は3回5時間実施)
- ・生徒の英語による表現力向上に向けての取組
まとまった分量の論理的な英文を書く機会を提供することに加え、ALT等からのフィードバックを適切に実施
授業中の言語活動で身に付けた自分の意見や教科書の要約を行う力の定着を定期・実力考査の自由英作文で測定
- ・毎時間の授業での取組
より効果的に4技能の伸長を図るため、各活動の目的・場面・状況を具体的に設定

成果①

【教員への成果】

- ・思考力や判断力を伸ばすため、4技能を統合した活動事例や活動の目的・場面・状況設定の重要性を学び、研修・講座後に情報を校内で共有
- ・ライティングのルーブリックに基づく評価に関して、教員のトレーニングの必要性を共通認識
- ・個々の教員の授業における工夫や活動内容を学び合い、より効果的な指導方法を協議するなど協働性が高まった

成果②

【生徒の変容】

- ・CEFR A2レベル相当以上の英語力を有すると思われる生徒数が10%アップ
H27 89.1%⇒H29 97.8%
- ・パラグラフの展開を意識し、読み取った英文内容に関して、リテリングやサマリーライティング活動を行うことにより、間違いを恐れず意欲的に自分の言葉で表現することができるようになった

今後の課題・方向性

- ・ライティングやスピーキングでのfluency(流暢さ)は伸長しているが、今後accuracy(正確さ)を高めていく必要がある
- ・パフォーマンステスト、とりわけスピーキングテストの円滑な実施と適切な評価についてさらなる検討が必要である
- ・ライティングの評価の妥当性や信頼性をさらに高める評価方法を検討する
- ・CAN-DOリストを、生徒の力の伸長に応じて再検討し改訂する必要がある

平成30年度「外部専門機関と連携した英語指導力向上事業」 ～愛知県立尾北高等学校～

現状の課題と課題解決のための手立て

- ・現在使用しているCAN-DOリスト、パフォーマンステスト、評価基準等を生徒の変化や学習指導要領の改訂に即して改善する
- ・普通科、国際教養科それぞれの生徒の学力とニーズに合わせた適切な達成目標を設定し、具体的な指導にあたる

具体の取組の内容

- ・愛知県立大学から講師を招き、校内で本校英語科を対象に新学習指導要領についての研修を実施
- ・地区別授業研修会、公開授業を行い、他校の英語教員や、小中学校の英語教員との研究協議、大学教授等からの指導・助言を受け、授業力向上につなげた
- ・全国英語教育研究団体連合会等の研究大会に参加し、学んだ事を英語科全体で共有し、授業改善に活用
- ・研修、研究大会で学んだ事に基づき、従来のCAN-DOリストを改訂し、それに準じた授業用ワークシートを作成
- ・思考力・判断力・表現力等の育成を目指し、新たにディベート活動を授業にて実施
- ・国際教養科の1年生による近隣の中学校での出前授業の実施

成果①

- ・全国高等学校英語スピーチコンテスト
東海北陸ブロック大会出場(2年連続、昨年度は全国2位)
改善したルーブリックに基づく指導により、「話す力」が向上した
- ・実用英語技能検定の合格者
準1級合格者5名(昨年度は2名)
1級合格者1名(昨年度は0名)

成果②

- 1) 授業の中で、「学習したことを整理して活用し、自分の考えをまとめて発表する」活動を取り入れるようになった
- 2) 「自律的、主体的な学習者を育てる」ことを意識して、生徒が授業の中心となって活動できるような授業に、さらに取り組むようになった
- 3) 新たに犬山市内の小・中学校教員(小11名、中2名)との合同研修会を実施し、小・中・高の連携を意識して授業に取り組むようになった

今後の課題・方向性

- 1) 日常的な話題については、ある程度自分の意見を述べたり、情報を整理して伝えることができる。今後は社会的な話題について、整理する知識を育成し、伝えるための語彙力を伸長させる必要がある
 - 2) リサーチした情報をそのまま伝えることはできる。今後はデータを分析し、解釈する力を育成する必要がある
- 今後の課題・方向性
- ・「やりとり」を意識した「ディベート力」の育成
 - ・語彙力の伸長
 - ・多読活動を通じた幅広い知識のインプット
 - ・他教科との連携